



Title	井元秀剛先生ご退職に寄せて
Author(s)	大田垣, 仁
Citation	Gallia. 2026, 65, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104481
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

井元秀剛先生ご退職に寄せて

大田 垣 仁

私は現在、近畿大学文芸学部で、メンタル・スペース理論に基づく比喩研究に取り組んでいます。その理論的基盤を築く学びを得たのは、井元秀剛先生のゼミでした。

先生との出会いは2005年、博士前期課程2年の頃です。メトニミーを研究テーマにしていた私は、この現象をより深く分析できる理論を探す中でジル・フォコニエのメンタル・スペース理論に出会い、それを専門にされている先生の存在を知りました。当時、私は文学研究科、先生は言語文化研究科に所属されていましたが、研究科を越えてゼミを受講することになりました。これが、私が理論的な研究方法を学ぶ出発点となりました。

大学院時代は必ずしも順調ではありませんでした。博士前期課程から後期課程への進学で迷い、研究生として再挑戦の修士論文に取り組む時期もありました。また、博士論文の執筆に行き詰まり、休学したこともありました。しかし、論文執筆を再開する決意を先生に伝えると、「それなら、今年のゼミでは君のテーマを一年使ってやってみようよ」と提案してくださいました。ゼミでは毎回、私の分析に対して理論的な精緻化を求められ、時には厳しい指摘もありましたが、それが概念の曖昧さを削ぎ落とし、論文の骨格を強固にしていきました。この一年間の議論と発見が博士号取得へとつながり、公開審査会では副査も務めていただきました。

ゼミ以外にも、論文や学会発表の予稿を書くたびに先生の研究室を訪ねました。何か気づきがあるとアポイントも取らずにノックしてしまうこともありましたが、先生はいつも快く迎えてくださり、丁寧に目を通して的確な助言をくださいました。そうした日常的なやりとりの積み重ねが、私の研究姿勢の土台を形作ったのだと思います。

大学院修了後、私は阪大の国語学研究室の助教として研究を続け、その後近畿大学に移りました。現在も比喩研究を続けられているのは、迷っていた私を支えてくださった先生のおかげです。先生は、停滞していた私の帆に風を送り込み、進むべき方向を示してくださった、追い風であり羅針盤でもある存在でした。

先生は囲碁を愛され、ペン習字を習得されるなど、学問以外の領域でも探究心を持ち続けておられる方です。ゼミの黒板に書かれた先生の美しい文字は、物事に真摯に向き合う姿勢の表れのように思えました。そうした先生の生き方そのものが、私にとっては無言の教えでもありました。

井元先生からは、「学恩」という言葉の重みを全身で実感させていただきました。

近年、ある学会の運営で久しぶりにご一緒でき、懐かしさとともに改めて感謝の思いが湧き上がっています。先生のこれまでのご厚情に深く御礼申し上げるとともに、今後のご健康と研究のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。

(近畿大学文芸学部・准教授)